

令和3年度 岡山県総合教育会議 議事録

1 日 時 令和4年1月21日(金)〈開会：13時10分、閉会：14時30分〉

2 場 所 県庁3階第1会議室

3 出席者 知 事 伊原木 隆太
教 育 長 鍵本 芳明
教 育 委 員 上地 玲子 服部 俊也 松田 欣也
梶谷 俊介 田野 美佐
高梁市立高梁中学校長 福原 洋子
岡山県立岡山工業高等学校長 文谷 元信

4 協議事項に係る出席者の発言

【総合政策局長】

これより令和3年度岡山県総合教育会議を開催させていただきます。
議事進行につきましては、議長である知事をお願いいたします。

【伊原木知事】

皆様、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

本日の会議のテーマは「今後の取組の方向性」についてであります。これからの予測困難な未来社会の中で、子どもたちが自立的に生き、社会の形成に参画していくためには、読解力、表現力、情報活用能力などとともに、他者と協働して新しい解や納得解を生み出す力、生涯にわたって学び続ける力などを着実に身に付ける必要があると考えております。

こうしたことから、学校においては、基礎学力等の定着を図るとともに、夢や目標の実現に向け、子どもの自ら学ぼうとする意欲やチャレンジ精神の喚起を図るため、PBL (Project Based Learning) の取組を推進していると伺っております。

本日は、効果的なPBLの取組を実践している高梁中学校の福原校長先生と岡山工業高校の文谷校長先生にもご出席をいただいております。ありがとうございます。皆さま方には、PBLの課題と、それを踏まえた今後の取組の方向性について、忌憚のないご意見をいただきたいと考えております。

まず、中学校における現状とこれまでの取組等について説明をお願いします。

【義務教育課長】

それでは、お手元の「小・中学校におけるPBL (課題解決型学習) の取組」という資

料をご覧ください。

先ほど、知事から、何のためにPBLの取組を推進しようとしているのか、その必要性についてご説明いただきましたので、私のほうからは、義務教育段階におけるPBLの現状と課題と今後の取組の方向性についてご説明させていただきます。

まず、1の現状と課題であります。地域を題材としたふるさと学習などでPBLに取り組んでいる学校もありますが、まだPBLの具体イメージがつかめず、教育課程の位置付けに苦慮している学校や、PBLに取り組んではいるものの、課題解決を通して育成すべき資質・能力が明確になっていない学校もあるのが現状であります。また、子どもの学ぶ意欲を高めるためには、PBLの取組の成果をアウトプットする場を設けるだけでなく、その体験を通じてどんな力が身に付いたのか、次はどのような学習に取り組んでいけばよいのかなど、その取組についてフィードバックする場を設定することが必要であると考えております。

こういった現状と課題を受けまして、2にあります今後の取組の方向性であります。 (1) にありますように、PBLの具体イメージをつかんで教育課程の位置付けなどが進み、多くの学校でこういったPBLの取組を行ってもらえるように、PBLのガイドブックを作成するとともに、(3) にありますように、課題解決に向け、情報収集、分析、まとめ・発表する際に、1人1台端末を活用した学びは大変効果的であると考えておりますので、児童・生徒が主体的に活用できるよう推進してまいりたいと考えております。

また、(2) にありますように、PBLの取組の発信やフィードバックの場として、おかやま学びたい賞・フォーラムを実施しております。義務教育課のホームページに優れた取組動画をアップしており、好事例を周知することでPBLの取組を推進させるとともに、子どもたちの学ぶ意欲の向上に努めてまいりたいと思います。

また、現在、高校で行われているような地域学の学びの基礎ベースをつくり上げていきたいと考えております。

今日、お越しの福原校長先生が勤務されている高梁中学校は、令和2年度のおかやま学びたい賞で最優秀賞を受賞した学校でありまして、そのときの取組についても、この後のご説明の中で触れていただけたらと思っております。福原先生、よろしく申し上げます。

私からの説明は以上でございます。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

では、申し上げます。

【福原校長】

失礼いたします。高梁中学校の校長をしております福原と申します。今日は、本校のPBLの取組についてお話しさせていただきます。よろしく申し上げます。

まず、本校の写真と概要でございます。生徒数等は見ての通りですが、約1年前にコミュニティ・スクールを導入しており、本年度はその1年目ということで活動しております。

本校は、5つの小学校が集まっており、市内にある6校の中学校のうち半分の中学生が本校にいます。これは、私にとって一つの大きな課題意識となっております。

実際にPBLをスタートさせたのは、令和2年度、昨年度のことでございます。このPBLをスタートする経緯は、本年度から新学習指導要領が全面実施となるので、そのための資質・能力を育成するのですが、特によりよい学校を通じてよりよい社会をつくるという、社会に開かれた教育課程の実現が必要であったということと、コミュニティ・スクールの導入を昨年度中にと考えておりましたので、コミュニティ・スクールの導入を目的とするのではなく、導入によって何を充実させるかを考えていく中で、本県の特色である高等学校での地域学につながっていく学びを、中学校段階までにやっておく必要があるのではないかと課題意識を持ってスタートいたしました。このとき、特に市内の半数の子どもが本校にいますということは、高梁市の将来を担う担い手の半数がいるということで、そのことの使命といいますか、本校の持つ大きな意義を感じてスタートいたしました。

とはいえ、私が赴任しました平成31年度、令和元年度につきましては、気になる数字がすぐに見つかりました。まず、先ほどのような、今後必要とされる資質・能力を育てるような総合的な学習での課題探究的なことがあまりできてきていないことと、生徒たちは地域への関心があまり高くないことが気になりました。そこで、総合的な学習で何をやっているかをひもといてみますと、1年でふるさと学習、2年で職場体験はあるものの、これらが非常に単発的であり、さらには3年の卒業時までには何もないという状況でした。

そのことを踏まえて、まず令和2年度は、3年生で地域をフィールドとした学習を組み立てようと教員に投げ掛け、地域貢献プロジェクトというものを実際に立ち上げました。このプロジェクトは、先ほどのような探究的な学習、つまり活動あって学びなしではなく、探究的な学習にすることと、キャリア教育という視点を必ず一つ織り込むことを目的に掲げました。

探究的な学習は、右側にもありますように、課題の設定から順次、まとめ・表現という過程をたどるのですが、ここで大きな壁にぶつかったのが、これまでにそういった学習を積み上げていないので、3年次に突然、高梁市の課題は何で、今後どういったものを自分たちが提案していくべきか、子どもたちは全く読めないというか、課題設定ができませんでした。

そこで、地域のさまざまな団体や事業所、行政とも連携しながら、今の高梁市の現状や大人が持っている課題意識、それから中学生に提案をしてほしい課題というのを地域からもらうという手法でスタートいたしました。その結果、多くの団体にご協力をいただき、令和2年度については、12の団体で19のプロジェクトを行いました。この一プロジェクトは、一班5～6人で一つのプロジェクトをやり切るという、生徒にとっても厳しいハードルではあったのですが、非常に面白いテーマをたくさんいただきまして、昨年度に実施

できました。

本年度は、さらにそれを引き続いてですが、これだけのプロジェクトを6人ほどの学年団の教員でやるのは非常に大変なことも分かりまして、もっと精選してもできるのではないかということで、本年度は6団体で8プロジェクトをやりました。その中で、昨年度と違ってきたのは、先輩がやったプロジェクトの続きをやるということで、さらに発展させるような取組も、本年度は取り組んでおります。

先ほど、課長さんからお話がありました、幸いにも、学びたい賞で最優秀賞と優秀賞をいただきまして、学校も、それから生徒たちも、非常に大きな励みと評価になったと思っております。その一つ、最優秀賞を頂いたのが、地元にありますバス会社と連携をして、バスに乗ってもらうプロジェクトを、市内の高校とも連携してやらせていただきました。細かいことは省かせていただきます。

それからもう一つは、地元にあります備中牛という肉牛があるのですが、地元での消費拡大ということで取り組みました。これはさらに発展的なことが見えなかったのですが、コロナの影響で、若干その後うまく活動が続かなかったところがあります。

実は、私ども教員も驚いたのですが、こういうプロジェクトを終えて、なかなか数字で示すことは難しいのですが、前後の感想や振り返りを見ますと、とてもびっくりするような、あの子たちがこんなことを考えたのだなというふうな感想が出てまいります。読み上げませんけれども、ここに出てくる内容というのは、いわゆる非認知能力というものの育成に、このPBLは必ずつながっていくという感触を非常に強く持ちました。これは、生徒を仮にA、B、C、D、E、Fとしているのですが、Eという生徒のところ、右側に〈1年後の声〉とありますけれども、たまたま今年度、本校の取組を教育時報に載せていただく機会がありまして、その生徒の声というところに卒業生の声を入れてみました。1年後といえますか、卒業生がそのとき書いていたのがこの文章です。1年たっても、このプロジェクトに対してこんな思いを持ってくれているということに非常に強く感銘を受けました。この子は、右上にあります高梁未来学の卵のようなものがありますが、このロゴマークも作ってくれて、昨年卒業しました。

実際に、協働先の企業のほうからも、100%、連携してよかったという声も頂きました。

本年度についてですが、3年生でこの地域貢献プロジェクトをやるという認識が、生徒にも先生にもできた結果、1年生、2年生できちっとその力を積み上げていかないとできないということも分かったので、この地域をフィールドにした学習を、高梁未来学という名前でパッケージ化して、地域の学習で、協働力や探究力とともに自分の将来を考えるとすることにしました。その結果、本年度につきましては、単なるふるさと学習であったものが、「発見！高梁スピリット！」という名前で、そちらにあるような学習に衣替えし、職場体験学習を「高梁ジョブ・リサーチ」というかたちで衣替えし、3学年全てで探究型、課題解決型の学習を組みました。先ほど、アウトプットという話もありましたが、必ずこの3つの学年とも、最後はアウトプットで終わるということで、単なる自分たちだけの学

習に閉じないということも意識して取り組んでおります。

それから、継続性という点で、3年生は相手先に自分たちの貢献プロジェクトを発表するだけでなく、下学年の2年生へも発表の機会を設け、次年度への引き継ぎも行ったところ です。

こういう取組をした結果、学年が違いますので、これが成果かどうかというのは正しくは検証の数字にはなっていないかと思いますが、先ほどあった気になる数字、全国学習状況調査のほうが、今年度の3年については、学校全体が変わっていく中で、総合的な学習の数字が非常に大きく上がってきております。また、地域への関心も上がってきております。それから、教員のアンケートのほうでも、自分たちで非認知能力の育成ができているか、あるいは地域との連携・協働で学習活動が充実しているかという数字も大きく上がりました。

最後に、この高梁未来学をどう評価していくかというのはとても大事な点だと思っています。今のようなプロジェクトを、大人からテーマをもらうのではなく、自らテーマを立てて課題解決していくにはその積み上げが必要ですが、そのためには、左側にあるような項目できちっとした評価基準、ルーブリックを今作っております。すみません、裏側が見えないようなかたちで書いてしまっているのは、まだ文言が確定しておりません。ほぼできているところですが、今、これを作っています。どのプロジェクトで何をやったかというよりは、それによって何の力が付いたかというアウトカム評価を必ずしていかなければならないと感じております。

今後についてですが、今のようなルーブリックも活用しながら、計画的に思い付きではない課題解決学習にしていくということと、ルーブリックができれば、ゴールイメージを教員と生徒と共有でき、このレベル1からスタートしようとする、小学校に何を要求するのか、高校にはそれ以降、何を引き継いでいくのかというのが明確になると考えています。そして、今、一番直面しているのが、それを指導する教員の力がなかなか十分でないというところで、タブレットの活用ももちろん進めておりますけれども、今のような教員のラインを引かない指導の仕方というところが大きな課題になっております。

以上です。ありがとうございました。

【伊原木知事】

福原先生、どうもありがとうございました。素晴らしい実績で感銘を受けました。

皆さま方、こういった取組に力を入れていくべきかなど、それぞれのお話、ご意見をお伺いしたいと思います。

【教育委員】

ありがとうございます。大変素晴らしい取組だなと思いました。本当にありがとうございます。

福原先生が入られた当初は、地域の活動はあったものの、まだつながりができていなかったということで、縦へのつながりを付けることがすごく大事だということが、お話を伺って本当によく分かりました。なおかつ、最後に見せていただいたループリックですが、地域活動は評価がとても難しいと思います。主観的だし、成績のようにここが何点とか付けにくいですが、あのように分かりやすく具体的なものがあれば、子どもたちも自分が次にどこを目指せばいいのかという目標になるし、それがもっと頑張りたいという意欲につながるのかなと思ってお話を伺いました。

以上です。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

ありがとうございます。さすが、福原校長先生。本当に実行力をお持ちになられていて、素晴らしい成果を導き出せているのではないかと考えています。まさに、子どもたちは、今まで自分たちの地域のことを知らずに、外へ出ていったり、またグローバルな社会だと言われながら、我が地域のことも知らずにグローバルを論じてみたり、そこに大きなギャップがあったらと思うています。

この中で、我が地域、それぞれ高梁であれば高梁の特徴やいいところを十分理解して次の学年に進んでいくというのは、本当に素晴らしい成果だと思います。ただ、今までの教育は、こういう視点も考え方もなくて、閉鎖された教育現場の中で、詰め込み型というか、いかに覚えるかということが多かったわけです。そのことが、今この高梁中学校に通っておられるお子さんの親世代の方々がどうかというと、こういう地域課題解決型の教育というのは受けておられないと思います。そういった中で、学校と家庭のギャップということになると、親の世代の方々をどうやって巻き込んでいくか、何かお考えがあったら聞かせていただけたらと思います、いかがでしょうか。

【福原校長】

まだまだこれからだと思っておりますが、ここでコミュニティ・スクール運営協議会がいかにも動くかだと思っております。学校運営協議会の中には、PTA会長さんも当然おられますので、PTA会長さんはこの動きをよくご存じで、非常に協力的で、地域のいろんな相手先を見つけるなど、CSの委員さんに関わっていただいています。学校からの発信もそうですが、PTA組織に対して会長さんの立場でいかに発信をしていくかは、会長さんも課題に思ってくださいですので、もっともっとうろんな願いをしてもいいのかなと、今の感触では思っています。来年度はそこに少し手を付けたいと、まさに思っているところです。ありがとうございます。

【教育委員】

地域で企業の取組と連携されたり、実際行われたりされていることは、学校の組織の中では報告されていくけれども、地域にフィードバックが返っていかない。次は、子どもたちのこういう地域課題を解決する能力が、例えば町内会や自分たちのコミュニティに返っていくような仕組みも考えていくことが大事なのではないかと思います。よろしく願います。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

今日は、いろいろとお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

3年生のときに課題設定ができないところから、こうやって高梁未来学というのを1年生、2年生、3年生と設定して、それを実行されているのはすごいなと思いました。やはり子どもたちは、最初はどうしても先生にやらされている感みたいなことがあって、意識改革をするのはすごく難しかったのではないかと思います。5～6人でみんながそれぞれの設定で、自分たちがやるという意識に変えていくこの取組は、すごいなと思いました。今回、1学年、2学年、3学年と総合的な学習はありますが、それが単体になっていることがたぶん多いと思います。それが結び付いていない。先生方も、それだけでかなり力を取られて大変なものを、こういうかたちで一括してされているということはすごいな。たぶん、子どもたちも1年生、2年生、3年生と結び付いていっているから、それが継続的な力になっているから、この取組を本当にいろんな学校に発信してやっていただきたいなと思います。

それに対して、先生方の意識改革もとても大変だったのではないかと思います。例えば、子どもたちがやらされ感ではなく、いかに自分たちがやっていくかを教えていくというか、気付かせるということがすごく大事になってくるので、すごくいい取組だと思いました。たぶん、子どもたちは、保護者にはそんなに学校であったこととか言わないと思いますが、こういうかたちでやっていることは、学校通信みたいなもので発信されますよね。ちょくちょく発信していただくと、子どもたちも自分たちがどんどん変わっていくことが成長につながって楽しいと思えるので、それによって保護者も協力的な体制になっていくのではないのかな。先ほど、PTA会長さんが協力的にされていると言われていたので、とてもいい流れなのではないのかと思います。

ただちょっと思ったのが、市内の半数の小学校から上がってこられているので、その小学校ごとのカラーというか、それを最初一つにまとめていくのが難しいところもあるかなと思いましたけど、本当にすごい取組だと思います。ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

3年生から始まって、初年度は3年からやって、本年度は2年目ということで1、2、3という体系的に積み上げられたので素晴らしいものだと思いますが、やはり先生方の意識改革が大変だったのではないかなと思います。

それから、今後こういうことをやっていこうと思うと、地域側の学校への理解がかなり重要になってくると思いますので、そういったことで、今年12団体から6団体に絞られたとのことですが、地域側がどういうふうに学校と関わっていけばいいかというのは、先ほどのコミュニティ・スクールの仕組みも使いながらしっかりと共有して、一緒になって高梁の将来の世代を育てるというものをつくっていただきたいと思います。

一応、倉敷ケーブルテレビの社長は商工会議所の会頭でもございまして、その辺としっかりと話をしながら、こうやっていくぞという話もして、経済団体側に学校の取組をいかに理解してもらって一緒にやれるかというところまで一緒につくっていただけると、きっといいのではないかと思います。この前、会ったときに、これをどうやるかが、地域が残るかどうかの肝になるよと言っておきました。

【伊原木知事】

どうもありがとうございました。

【教育委員】

ありがとうございました。

私はたまたま、この教育委員という場にいさせていただいているので、PBLとか、そういうことを多少は理解することができますが、やはり学校の先生方をはじめ地域の方、保護者の皆さんが、どれだけこの取組、狙い、目的というものを理解しているのかについては、まだ不安と疑問が残ります。どうしても難しい言葉が出てきますし、子どもたちが実際に今、取り組んでいることの目的とか意味みたいなものを、どれだけイメージ、理解できているのかなというところが、やはりポイントになってくるのではないかと思います。

企業も今は、例えばSDGsなんていうものをどこの企業もやっていますけれども、私もやっていて思うのは、取り組んでいる従業員が、果たしてどこまでそれを理解しているのかというところは、まだまだ課題が多いと思っています。それと同じように、このPBLについても、そういったところが同じように課題として、まだまだ取り組む余地があるのではないかと感じています。すみません。短い発表だったので、それ以外のお話を伺えばもっと納得できる部分があるのかもしれない。

あと、アンケートで、企業が「参加してよかった」という回答率が100%ということで、これももっともっと企業の参加意識というか、目的みたいなものも考えていかなければならないと思います。我々もやはり、受け入れたり、いろいろそういう場に出ていったりすることは多くなったのですが、まだまだボランティアというところがあって、まあやってよかったかなというのが、申し訳ございませんが私たちの実感です。そういったことも、今SDGsという言葉が普及してきたので、以前よりもハードルが下がって、皆さんの意識は高まっていると思います。今まさに、いろいろチャレンジしていくいい機会、タイミングではないかと私たちも感じておりますので、積極的にやっていきたいですし、さらに取組を進めていただけるといいのではないかと考えております。

【教育委員】

ちょっと1点、追加で質問いいですか。

今、高梁中学校でこういうことやりました。中学校の前の小学校でどう準備してもらうかとか、高校へどうつなぐかというところを、今どのような活動でつなぎかけておられるのか。

【福原校長】

正直なところ、小学校のほうとは、まだ具体的な、ここに至るまでのつなぎのところはできていません。

【伊原木知事】

高校の地域学が、ようやく中学に下りてきたばかりですね。

【福原校長】

ただ、高梁市につきましては、例えば高梁城南高校、先日もキャリア教育の関係で表彰を受けられましたけれども、そちらの探究的な学習もされていますので、次年度に向けては、高校の探究的な学習の、少しレベルが高い発表を中学校に来てやっていただくか、中学校とオンラインで結んで、同じ場で中学生が聞けるようにしていけたらいいなという話までは進んでおります。

【伊原木知事】

いずれね。ありがとうございました。

【教育長】

学習指導要領が、実は中学校は今年から変更になりまして、来年は高等学校、小学校はその前にやっているわけですけど、何が大きく変わったかというところ、いわゆるこれまでの

教育というのは、とにかくしっかり知識を頭の中に詰め込んで問題が解けるようになりましょうというものから、やっぱりコロナもそうですけど、これからどうなっていくか先が見通せないという危機意識が大きな教育の方向を変えていて、こうなったときにあなたはどうしますかという答えを、子ども自身が見つけられなきゃいけないというところから大きく変わっています。例えば、我々がPBLということを非常に重要視しているのは、当然、基礎からの知識、技能は付けなければいけないのですが、それがどう使えるか。使えないと意味がないじゃないかというところからスタートしているので、今日の実践発表もそうですけども、それを子どもたち自身に考える場、自分で決めさせる場、そしてそれをしゃべらせる場をつくっていかなければいけないということで、岡山県全体で今進めている、一番トップを走っているのが高梁中学校であるわけです。

そういう中で、子どもたちが人とつながるときにどういうことを身に付けなければいけないのか。それから、課題があったときに、その課題に対して自分たちは何ができるのか。もっと言うと、自分は最終的に地域のためにどうしていこうか、どんな大人になろうか。どんな関わり方ができるかという意識まで持っていきたいと思っているので、こういったことを積み上げていき、さらに高校へバトンタッチして行って、この後は高校の話もありますけども、最終的には地域を支える人材というところへつなげていきたいと考えているところでもあります。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

では、続いて高校における現状と取組について、説明をいただけますでしょうか。

【高校教育課長】

それでは、失礼いたします。PBLを推進する狙いにつきましては、義務教育段階も高校段階も同じでございます。「県立高校におけるPBL（課題解決型学習）の取組」の資料をご覧くださいと思います。

高校段階のPBLにつきましては、自己の在り方、生き方、一体的で不可分な課題を自ら発見し、他者と協働しながら解決する学習としまして、より社会キャリア教育形成を意識した取組となることが大切でありまして、併せて義務教育段階の取組を踏まえて、より高度化、自立的な探究活動となるよう取り組んでいるところでございます。

1 現状と課題の、(1) 現状にありますように、高校は、学校種、置かれている地域の状況等が異なりますので、各県立高校が育成を目指す資質・能力との関連において様々なPBLが実施をされております。大きく分けると、その下の白い丸印のところになりますが、指定校事業における取組、「地域学」における取組、専門高校における課題研究の取組に分けられると思っております。

指定校事業、特に国の指定校事業であるSSHやWWL、こういった非常にハイヤーな

事業指定を受けている学校が県立高校の中にございます。特徴としましては、社会課題と学問とのつながりを意識した、いわゆる学術探究型というものが展開をされてございます。

「地域学」における取組につきましては、これは広く県立高校で取り組まれておるものをございまして、地域の課題を自らの課題と捉え、主体的にそれらの解決に取り組む学習でございます。

専門高校における課題研究の取組としましては、専門高校の学科の特色、専門性、こういったものからPBLに取り組んでいる。さらに、特徴としましては、成果を実際の商品開発、物づくりといった形にするといったところがPBLのまた特徴でもございます。

県教委としましては、こうした取組の成果をアウトプットする機会の提供に努めているところをございまして、今年度も昨年末に、高校生探究フォーラム等を開催したところをございます。こうした取組の成果を、総合型とか学校推薦型の大学入試等につなげて、合格者を増やしているような高校も出てきており、成果も見られているところをございます。

ただ一方、課題としましては、まだ探究活動の深まりが十分でない。さらには、キャリア形成につなげる手だてでありますとか、各教科の学びとどう連携させていくのか、こういったあたりが十分でない取組もございます。また、生徒の主体的な学びを支援する、これまで教えることに主眼を置いていた教員からすれば、大きく指導法を転換しなければいけません、そういったことに不慣れな教員が多いと、まだそういった面が見られます。

そこで、取組としましては、義務教育と同様、PBLガイドブックを今年度中に作成してモデルを示し、かつ事例についてはウェブに載せるというかたちで、随時、新しいものに更新していきたいと思っております。

また、成果をアウトプットする機会としましては、フォーラムにおきまして、産業界や大学の関係者にも参加していただき、いわゆる実社会からの評価、フィードバックを受ける機会の充実は今後努めていきたいと考えているところをございます。

以上でございます。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【文谷校長】

岡山工業高校の文谷でございます。本日は、このような機会を頂戴いたしまして、本当にありがとうございます。10分という限られた時間で、かなり飛ばしての説明になりますけれども、よろしく願いいたします。

アジェンダにつきましては、こういった流れで説明させていただきます。

県の指定事業、高校魅力化推進事業を令和元年度から本年度末までいただいております、そのテーマといたしまして、「STEAM教育による、社会の第一線で活躍できる専門的職業人の育成」と、こういうことで取り組んでまいりました。そこに書いてあります

ような、いろいろな今世の中の状況の中で、これから本当に必要な力として、課題発見解決能力（PBL）、そして発想力・創造力、そういったデザイン思考的な力が絶対的に必要であるということから、その力を育成する取組をやってまいりました。

まず、横のつながりでございますが、岡工STEAMとして様々な横断連携を取り組んでおるところでございます。大学との連携、例えば専門科と数学であるとか、建築科と英語であるとか、それからロングホームルームとの連携、そういった横の連携を意識しまして、1つの教科、科目にとらわれないような取組に発展させております。

縦の連携でございます。岡工PBLといたしまして、OCPという略語で校内名称にしております。3年間の学びの中で、どのように力を付けていくかがポイントでございます。1年のロングホームルームでのOCP入門、2年の総探、ここでOCP演習、そして3年の課題研究で実践、そしてその枠に収まらないものをOCP発展ということで、岡工STEAMラボという名称を付けて、学科を超えた取組でありますとか特別授業、大学と連携して、AI基礎でありますとかデータサイエンス入門、そういった特別授業をやっております。そういったものを、こういう課外のSTEAMラボに位置付けております。

まず、1年のロングホームルームで実施しておりますOCP入門でございますが、このポイントは何と言いましてもミックスHRということでございます。残念ながら、コロナで、この2年間はこのようなかたちでクラスをまたいでのホームルームが、残念ながらできておりません。これは初年度、まだコロナがはやっていなかったときに、マスクをしていない写真でございますけれども、現3年生が1年生のときにやったOCP入門でございます。こうやって学科を超えて話をするというのは、本当に工業高校にとってはなかなかない機会でございます。そういった中で、ほかの科の考え方が分かったなど、今まで接点なかった生徒たちの考え方、学びが混じった、そういった瞬間でございました。

2年生の総合的な探究の時間でございます。前半は、ここへありますようなマシュマロチャレンジ、エッグドロップコンテストのようなもので、チームビルディングを意識して実施しております。これも本来でしたら、ミックスでやりたいところではございましたけれども、残念ながら、この2年間はできておりません。

それから、2年生の総探の後半でございますが、演習Ⅱといたしまして、実際にチームでアイデアをしっかり考え、そして学外のコンペに全員、全チームが応募しようということで取り組んでおります。令和2年度は、岡山県の岡山モノづくり学生アイデア・デザインコンテストに応募し、たくさんの賞を頂戴いたしました。残念ながら、本年度はこのコンテストがございましたので、よく似たコンペということで、新潟県の燕市で開催されますコンペに応募したところでございます。実際、学内の評価ではなく、学外の、それもこの燕に至りましては、本当にプロと戦う場でございます。そういった真剣勝負の場に高校生が自分たちのアイデアを出していくということで、結果はどうなるか分かりませんけれども、本当に一生懸命取り組んでおりました。

3年生、課題研究という授業が、職業系の学校には全てでございます。この課題研究の取

組をO C P実践ということで、いろいろ学外との連携に使っております。左側にありますチラシでございますが、年度末近くなりましたら、学校近隣の公共施設を中心に配布させていただいております。これは何かと申しますと、工業の力で困ったことを解決しますよと、ぜひそういった課題を本校にくださいというチラシでございます。福原校長先生のご説明にありましたけれども、地域からの課題をこういうかたちで頂戴して取り組み、また贈呈等をするることによって、地域貢献にもつながる、本当に達成感のある取組になっております。

具体例を写真で3つ挙げておりますが、これは昨年度の取組でございます。こうもり塚古墳の内部の石室のV R化、それから池田動物園、そして奉還町の活性化プロジェクトといった取組をしております。継続して取り組んでいるものもたくさんございます。

その他の連携先というふうに挙げておりますけれども、現段階ではこういった公共施設、教育機関と連携をすることにより、生徒たちが本当に活動する目的、そして意義を理解していただけたところと連携をしているところでございます。

そして、課外とありますが、O C P発展といたしまして、岡工S T E A Mラボをしております。先ほども紹介いたしましたA I基礎、これは金沢工業大学とオンラインでつながりまして、A Iの基礎について学ぶ講座でございます。それから、真ん中でございますけれども、本校は本年度創立120周年を迎えました。そこで、学校を中心といたしましたこのような鳥瞰図を、生徒たち30人ぐらいの有志が集まりまして、それぞれ64分割して描いて、それをパソコンへ集めて一つのものにしました。原画を集めると、本当に何メートル×何メートルというサイズのものでございますけれども、今はこういう形にしておりますが、本年度中には本校の玄関のピロティへ、120×180ぐらいのサイズで掲示をして、記念のものとしようと思っております。よろしければ、回させていただきます。

それから、右側は、専門科が7科ありますけれども、その7科に直属した同好会の会長、部長が集まって、これから岡工をどうやっていこうかな、どんなことができるかなというような夢を語る座談会を開催したところのものでございます。まだ、この取組につきましては、今後、どう発展していくか、私も楽しみにしておりますが、いろいろ可能性を秘めた活動になるというふうに考えております。

そして、次は、本校でS D G sの取組でございますが、本日の別添の資料にもプリントを挟んでおります。本校の学びというのが、本当に将来の産業界の人材を育成するという意味で、日頃の専門科を中心とした授業が、S D G sのゴールを達成するため、本当に直接的につながっているという意識を持たせるために、これは一般向けというよりも生徒向けに作ったものでございます。今まで学校でS D G sの勉強をしてないと思っていたけれども、実はこれだけつながった勉強をしていると。こういったことを意識させるだけで、生徒の意識は本当に変わってまいりました。こういったことをしっかりと生徒に浸透させながら取り組んでいく中で、この3年間取り組んでまいりましたP B L、S T E A M教育というのが、まさにこのS D G sを達成するための力を育成しているということにあらため

て気付きました、生徒たちもそういった気づきを基に、自分の学習をさらに深めていっているところがございます。

英語でのSDGsの授業でありますとか、ロングホームルーム、それからいろいろな発表会で発表させていただいたことも、情報発信を含めてアウトプット、そういったことも含めて取り組んでいるところがございます。

最後のプレゼンでございますけれども、生徒の活躍ということで、いろいろ活躍を挙げさせていただいております。進学実績のところ、本年度、国公立大学17名合格ということで、元年度が5名、昨年度が12名、そして本年度17名というふうに、岡山大学を含めた国公立大学の進学が増加しております。また、就職につきましても、なかなかこれは企業の職種分類とかが難しいですけれども、明らかに研究開発、それから技術系の職種に就きたいという希望が増えております。また、企業のほうからも、ここ数年で、そういった技術開発関係の求人枠をいただいております。コロナ禍でございますけれども、トヨタさんとかデンソーさん、アイシンさん、そういったトヨタグループさんを中心に、全国の企業から求人をいただいているところがございます。

そして、最後でございますが、アンケートを1枚用意させていただいております。字が小さくて申し訳ございませんが、これは現3年生、つまり1年生からこのOCPを経験した生徒たちにとったアンケートでございます。青色のバーが入学時の自分を振り返っての評価、そしてオレンジが現段階での評価ということで、この9つの項目につきまして、全ていいほうに変容しているということが見て取れると思います。この9つの項目というのは、もう一枚挟んでいますこのOCPの説明にありますこの下側、ここで身に付く力、これを具体的に取ったものがこの9つの項目でございます。このように、グラフで変容というの、ありがたいことにしっかり出てきたなというふうに思っております。

最後に、課題でございます。課題、先ほどの福原先生のお話にもありましたように、やはりPBLをファシリテートする教員の力、そういった教員の育成、養成が非常に大切であると思います。同時に、外部とつながる力を、学校の先生方にもっともっと機会を持たせてやる必要があるというふうに思っております。やはりこの2つは非常にリンクしております、外とつながる力があれば、その中で生徒をどう伸ばしていくかという考えが出てまいります。そのような教員をもっと育成していかなければならないというのが、本校が3年間やってきても温度差がございます。課題であるというふうに考えます。

短時間で駆け足になりましたけれども、以上でございます。

【伊原木知事】

文谷先生、どうもありがとうございました。

それでは、また委員の皆さんからご意見をお願いします。

【教育委員】

本当にありがとうございました。

私たち、実は昨年、視察に行かせていただいて、実際に生徒さんの活動を本当にライブで見せていただきました。そのときにも、本当に素晴らしい取組だなと思ひまして、要は各学科での横のつながりとか、それだけでもすごいなと思うのですが、外とのつながりも本当にパワフルにこなしておられて、しかもそれが賞をいただく成果につなげるというのは、おそらく生徒さんや保護者にとっても大変やる気の出る取組じゃないかなというふうに感じております。また、見える化のようにアンケートを取って、3年後にこんなふう成長しましたということがグラフで出てくるということも、きっと生徒さんご本人も、自分ができるようになったということを目で見て実感できるという意味では、本当にいいなと思ひました。

ただ、先ほど課題だと言われた教員の育成というか、ファシリテートする力というのは、よく考えたら大学の教員養成課程ではそんな授業はない。ファシリテートする外部とのつながりとか、企業さんに行って生徒とつなげる授業というのがない。もしかしたら、そういったところも動いていかないといけないのかなと思ひていて、要は、そういうことを大学で養成されていない人が教員になって、企業にも就職せずに教員になってしまうわけですから、きっと全然知らない分野をやらないといけないという意味では、高校とか高梁中学校とかに、大学生がボランティアとか勉強に行かせていただいて、実際に外とこんなふうにつながるというのを学ぶ機会が、もしかしたら必要なのではないかと、今日お話を聞きながら思ひました。ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

素晴らしい取組でございました。SDGsアワードのときに、来ていただきまして、感心をさせていただいた次第ですし、こうやって学校での探究なり取組を、世の中に出ていったらどういったつながりができるのか、それはSDGsの観点でつながりを明確にされて、今習っていることが将来何に役立って、何をしていかなければいけないのかということも明確にされて取り組んでいることというのは、本当に素晴らしいことだと思ひています。なかなかこういった成果を、私はアワードで生の声を聞かせていただきましたが、先ほども中学校のところで話ししましたが、こんなに教育は今変わっているということを、ぜひ多くの方々にご理解いただけるように発表してもらいたいなど。つつい我々、教育委員会の立場で言うと、教育現場にもっと広めてフィードバックをしていこうとなりがちですが、あまり世の中の方は気付いてなくて、ぜひともそういう発信にも力を入れていただけたらと思ひます。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

今日は、お話をありがとうございました。また、昨年度もお伺いさせていただいて、子どもたちがみんなすごくあいさつもよくされるし、それぞれいろんな科を見させて頂きましたが、その科で担当の子が、今こういうことをやっているという説明をしていただいて、子どもたちが生き生きしている、楽しみの中に勉強している、やらされ感がないというか、すごくそれが印象に残っています。

あと、女の子が、大きな絵を描くのに、いろんな色のペットボトルのキャップを細かくちぎって、本当にちぎるといふか切って、それを貼り付けていく。ああいう発想もすごいなと思いました。何を使っているのか、分からなかった。本当に子どもたちの発想というのはすごいものがあるので、それを引き上げる先生方も大変だなと思いますが、前も梶谷さんがおっしゃっていましたが、先生が教えるというよりは、先生も一緒になって勉強するというか、そういうのが本当に大事なのかなと思います。そういう取組は、子どもたちもすごく楽しそうにしていたので、同じ工業高校さんとかと連携して、いろいろ競い合ったりされたら、もっともっといいのではないのかなと思います。ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

ありがとうございました。

文谷先生には、いろんなところでお世話になります。

あらためて、この1年生のミックスホームルームというか、自分の専門科ではない人とつながっていくというのは、これは非常にいいことだろうと思いますし、これは1年だけではなくて、学年が上がっても時々やるとか、本当はこういうのが、他流といいますか、工業高校だけでなく、例えば商業高校だとか、農業高校だとか、普通科だとか、そんな違う高校とも出会うことよって、自分たちがやっていることが、ほかとの関係の中で自分たちの役割がより見えてくるのだろうと思います。ぜひこれをさらに発展してできるようになればと思います。

それから、外部への発信は非常に重要だと思うのですが、学校から発信しても、経済界が学校の発信を見ているかという、ほとんど見てないのが通常ではないかと思います。そういう意味で言うと、学校の取組を経済界や外部に発信するのであれば、外部にネットワークを持っているところの事務局あたりとしっかりと組んで、そこを通して発信してもらうことが必要なのではないかと思います。ですから、本当言うと、新しい学習指導要領

も地域に知ってもらふ必要があるのですが、どうしても教育委員会からの発信だとなかなかつながりません。今日は総合教育会議ですので、例えば県庁で言うと、産業労働部から経済界に、学校はこういう取組をやっているから協力してほしいという発信をするなどしていただくと、日頃、窓口をしている産労から経済団体来ると、動きやすいのかなと思います。

【伊原木知事】

普段のつながりがありますからね。

【教育委員】

どこを使えば、うまく周知できるかも一緒に考えてやればよいなと思っています。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

ありがとうございました。

私も、昨年、学校を視察させていただきました。初めて工業高校の敷地内に足を踏み入れて拝見させていただいて、私がずっと長年持っていた工業高校のイメージと全然違って、大変失礼しました。生徒たちの活動の様子を見ていて思ったのは、遊ぶがごとく学んでいるという印象です。遊ぶというのは、ただ楽しいこと、やりたいことをやっているというだけではなく、やはり僕もそうでしたけど、遊びって自分が主役なので、自分事として、自分なりの発見をしているような感動を学校生活でして、そういった子は自前のやり方とか、自分の答えを導き出す力を学校生活の中で付けていると思います。これからの世の中、そういう力が求められているので、工業高校はすごいなという認識を新たにしました次第です。

ここでどういうふうに教えていくかという中で、企業もどうしても指示命令で、ヒエラルキー組織の中でやっていますので、遊び心なんていうものは絶対持てないわけであって、今日もいろいろお話しいただきましたけども、横のつながりは、コロナで残念ながらできなかったミックスホームルームとか、部活動とか、地域とのつながりとか、こういう知識だけじゃなくて人間関係をつくれる、そういう取組といったようなものがこれから大事になってくるのではないかと考えた次第です。ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

では、教育長お願いします。

【教育長】

最初にも学習指導要領のお話をしましたけども、中教審の答申の中に「子どもを主語に」という言葉があります。学校は子どもが中心ですが、やはり教師が主人公になった授業が展開されてきたものから、子どもを中心に置いたことによって、今日、委員の皆さん方からは、やっぱり生き生きしているとか、遊ぶがごとくというお話がありましたけども、そういう学習にだんだん転換してきているのだらうと思っています。

そして、教師のほうは、今度は伴走する教師という言葉が中教審の答申の中に出てきました。「伴走」は、共に走るほうの伴走で、要はパラマソンの伴走者のようなイメージです。あくまでも、子どもが走るのを側面からサポートしていくというような学習形態が、今日も話があったPBLだと思います。そうしていかないと、本当の意味での主体性は育っていかない。今までも優秀な生徒は育っていますが、もう一歩、社会に出てから自分で突き進んでいけるようなエネルギーを持たせたいと思ったときに、やっぱりPBLというのは有効なのかなというのは、最近実感しているところであります。まさにそれが、夢育の最終形といいますか、自分の夢に向かって走っていけるような若者ということが必要なのだらうと思います。

そのために、今まさに、文谷校長先生もおっしゃられましたけど、各学校は、とにかくいろんなところに出ていって、いろんなコンテストに他流試合を挑むということをやってくれていますので、岡工もそうですし、それから先般の日本政策金融公庫、全国からいろんなビジネスプランが集まっているのですが、その10本の中に岡山県が2本入っていました。これは本当に画期的なことだと思いますので、これからもしっかり取り組んでもらえたらと思っています。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

中学の取組について福原先生、高校の取組について文谷先生にお話をお伺いしたところでもあります。今日のテーマが「今後の取組の方向性」ということですので、その主な取組としてPBLを取り上げたわけですけれども、PBL、またそれ以外に関しても、取組についてご意見があれば。いやもう十分言いたいこと言ったということであればいいのですが、お話をお伺いしたいと思います。

【教育委員】

先ほど言われた「伴走する教師」を、大学では養成していない。やっぱり、これはすごく課題だなと思ったのですが、じゃあカリキュラムの中にどうやってそれを入れるかは、ちょっとすぐに想像ができなくて、中教審でそのように挙がるということは、必要性は感じていると。ただじゃあ、それを具体的にどうやっていくのかは分からなくて、ぜひ教育

長さんにご助言いただけたらなと思います。

非認知能力の部分育てる、それを引き出すやり方も、大学生たちは一体どうやって学ぶのかが分からなくて。1つ、ちょっとこれができるのかもしれないと思いついたのは、岡山県の教育委員会がやっている夢育の研修に、大学生のうちから積極的に参加してもらおう。それからPBLをすごく頑張ってくださっている学校に、ボランティアで毎週のように出向き、子どもたちや先生たちの姿を見てそこから学ぶ。それが授業の一環になればいいのかなとちょっと思ったりもしました。

【伊原木知事】

どうもありがとうございました。

【教育委員】

今、世の中の変化に合わせて、我々、教育現場も大きく変わっていく中であって、そういったことをより地域で生活されている方々や、地域の特徴を生かして営んでおられる企業などに、知っていただく機会をつくっていかないといけないと思っています。子どもたちも、習っている学問の延長線上に、どう地域がつながって、できれば岡山とつながっていただいて、岡山を愛して、岡山に残っていただけるようにつなげていかないといけないと思います。そのためにも、いかにうまく情報発信をしていくのか。そして、地域がもっと気楽に参画して、共有して理解ができるようなトラックバース的な組織をうまくつくっていかないといけないなと思っています。

ついつい産業界、特に工業はこうなっていく部分もあるのですが、産業界ばかりではなく、例えば地域の教育、地域の資源といったときに、先ほども少しお話ししたのですが、例えば地域の町内会単位で活動がリンクされているかという、それは学校でやることだというのが今までの考え方だったのではないかと思います。このあたりに取り組んでいくことを、我々、教育委員会も考えていかないといけないのではないかと思います。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

今後の方向性ということを考えると、今年から18歳で成人になり、それで世の中に放り出されるわけです。それで思ったのが、家庭で教えられるのかもしれないですけど、金銭的なもの、カードのこととか、そういう学習もきちんと教えておいてあげないといけないなと思います。また、自分でご飯を作る、何かを作るという生きる力を身に付けさせるためにも、食育というのはこれからとても大事になってくるのかなと思うので、自分たちで考える学習プラス、生きる力を、自分で何とか解決する、自分で家のことが、生活する

ことができるということも、本当は家庭でしないといけないことだとは思いますが、なかなか家庭任せでは難しい部分もあると思うので、そういう知識をきちんと教えるというか、ご飯の炊き方だって知らないお子さんも結構おられるので、そういう初歩的なことも、基本ですが、どうやって学校でうまく、そういうことも含めて、食育としてできることがあればいいかなと思いました。

【伊原木知事】

ありがとうございます。

【教育委員】

今後の方向性とする、学校にどう地域が関わるかということでしょうし、それは産業界だけではなくなる気もします。私はやっぱり、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動という、この2つの仕組みを、それぞれの学校というか、行政単位ぐらいで、本当に機能するものとしてどうつくり上げていくのか。そのベースになるのは、自分たちの地域をどういう地域にするかという、まずはこういう地域にしたいという思いをみんなで話し合う場が要ると思っています。その中に、今までは中学生とか高校生は、その話し合いの場の中にいなかったと思います。自分たちの地域をどうするというのは、まだ子どもだから入れなかったけど、実は彼らがこの地域で今後暮らしていくとすると、中学生、高校生もその輪の中に組み込んで、どんな地域にしたい、こんなところだったら自分たちもいたい、そのためにはどういう学びをするかというところを入れながら、じゃあ学校でどういうものを教育し、地域側とすると、産業界はどこを手伝い、町内会はこういうところを手伝うよというようなかたちで、地域ぐるみでこの地域の未来像を描きながら一緒に育ち合うという、そのような仕組み。今までのようにかたちが決まっていると、大人のほうがよく知っていて教えるというスタンスですが、何が起こるか分からないとなると、子どもたちと大人と一緒に学び合いながらここをつくっていくような、そういった中で、ある意味で言うと、伴走的なところにもつながると。そういう意味でいうと、学校の先生も、学校の中だけじゃなくて、自分が暮らしている地域から地域の住民として出ていき、お互いの教育力というか、育ち合う、学び合う力を高め合っていく、そんなところが必要になってくるのではないかと思います。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

僕は、成果主義なるものをやめなきゃいけないというふうに思います。企業が今、そっちの方向に組織が傾いていますけども、学校はそこを絶対死守しなければいけないと思っ

ております。人との比較ですから、成果の反対側で失望する人たちがたくさん出てくるわけです。大事なことは、以前の自分よりどれだけ自分が成長したかということですし、頑張った人を頑張ったなりに評価していくことが大事だと思います。教員や大人たちは、心血を注いでそのあたりを見ていくことが大事になってくると思います。

最近、テスラのイーロン・マスクさんの本を読んだのですが、そんな人が育ってくれるといいなというふうに。

【伊原木知事】

1人出てくれるだけで、岡山も大きく変わりますよね。

教育長、よろしくをお願いします。

【教育長】

ありがとうございます。伴走する教師を育てることは、大学ともお話をしていかなければいけないと我々も思っております。岡山大学は、今、県北で教員を育てるプログラムをやっています。ちょうどここで卒業生が出るのですが、岡大に在籍しながら、教育実習やいろんなイベントを全部県北でやっています。全部の学生がそうはいかないにしても、先ほど委員がおっしゃったように、学生の頃から地域に関わる経験をしっかりしていただく。これからは、ああいう高校生が今度は大学に入っていくので、様子が変わってくるのだらうと思います。そういった場を学生のころからしっかり持ちながら関わる経験をしてもらう。

それからもう一つ、教育委員会として今後を見据えてやっていかないといけないのは、先ほどコミュニティ・スクールの話がありましたけども、ありがたいことに経済界とのつながりもございます。学校と企業であったり、学校と大学であったり、教育だけでやっていこうではなく、学校もそうですが、委員の皆さま方にもお手伝いいただいて、世の中をどういうふうにしていけばいいのかを議論するような場を教育委員会としてもしっかりつくって、お話をさせていただいて、その中で子どもたちを育てていくことが必要なのかなと思っております。ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。本当に今日、有意義な議論ができたと思っております。そもそも教育とは、ほんの100年、200年ぐらい前まで、なかなか受けられない。親の手伝いしているうちにお米を作る。そこから寺子屋とか、特権階級の人なら、本を読もうかということだったのでしょうが、そこからようやく明治維新で、みんな小学校へ行きましょうねという、読み書きそろばんをみんなやりましょうというあたりから、確実に良くなってきたと思います。どんどん良くなっていく過程で、たぶんインプット幻想というか、とにかくいっぱいいろんな大事なことを入れてあげれば、いつか放り出した後、自立した後に

使ってくれるだろうということで、延々、6、3、3の12年プラス4年間インプットをして、私自身も同級生もそうでしたけど、散々インプットされて、一部腐っていると。それで外に出ていったら、意外と使えていなかったと。私の場合、その後、大学院に入れたのでまだちょっとあれですが、インプットしてアウトプットして、インプットしてアウトプット……、このサイクルをもっともっと回してあげるのはすごく大事で、とにかくこれまでインプットばかりやってきたので、アウトプットさせる。逆に言えば、十分にインプットしてないうちにアウトプットすることで、インプットが足りてないことに気付いてしっかり頑張れとか。結局のところ、アウトプットされないインプットにどれだけ意味があるのかということで、不十分であっても実社会でアウトプットできることを見通した教育が大事だということで、このプロジェクト・ベースド・ラーニング、素晴らしいと思います。人生は基本プロジェクトですから、子育てもプロジェクトだし、今日の献立を考えて食事を作るのもプロジェクトですし、仕事の中のあれの中のこれのという、プロジェクトの入れ子状態、それをそれぞれどういうふうに戻していくかということで、実社会ではアウトプットというのはすごく大事なことだと思っています。

結局、散々勉強したのに、実社会に出て使えない。もしくは、自分とすれば急に放り出されたような感じがするのも、本来、社会であなたの人生で誰が主役かという、この人が主役なわけで、その人が実社会でうまく周りの人と協力しながら、いい仕事、いい人生を送るための準備をしていたはずなのに、良かれと思ってえらい高度なところに引っ張って行って、自分が主役だという感覚すら持たせずに放り出すというのは、たぶん頑張り過ぎていてという思いがあります。経済学は、途中からホモエコノミカスを前提にする、とにかく自分が得になるような行動を取るという前提を置くと、ものすごくきれいに理論が組み上がって、ご案内の通り、微分方程式をぐちゃぐちゃ使ってすごい理論ができて、美しい、の一言ですけれども実態に合わない。結局、人間はそうじゃないので、そこから組み直すと、そこまで全然格好よくないけどかなり使える理論が出てくる。本当に学校はそもそも何のためにあって、我々はどんな未来の社会人をつくりたいのかということに思いをはせると、このプロジェクト・ベースド・ラーニングというのは、そんなにもものすごく革新的なことというよりは、もともとドカッとやってドンというのではなく、一つ一つ確かめながらやっていこうねという、非常に当たり前のことに見えてきます。本当に楽しみにしているところです。

実際、それをやって、生徒が元気になったと。私は行っていませんが、皆さんが行かれたときに「いい学校だな」と思っているのは、いい方向に進んでいるサインだと、非常にうれしく思っています。

本当にありがとうございます。県、教育委員会の皆さん、本当に皆さん方、それぞれ考えが一致する必要はないのですが、それぞれ違うバックグラウンド、違う地域から来られた方が忌憚のないお話をされて、ぴったり一致する必要はないけれども、重なっている感じを持つことができている、今こんなことをしている、ここで困っているという報告を受

けても、「ええっ、こんなことが起きているの？」というのではなく、そうだよ、みんなで頑張ろうねという一体感がきちんと保たれているのは、私はいいことだと思っています。あとは、今日も何度も出てきましたけれども、教育というのはとても大事なことで、教育者だけには任せておけないという有名ながありますけれども、いろんな人に関わってもらって、ぜひより良い教育をしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、本当にお忙しい中ありがとうございました。特に、福原先生、文谷先生、来ていただいたのもありがたいですし、そもそも来ていただけるようお願いしていたということで、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

どうもありがとうございました。